

結婚關係

笹沢左保

集英社



婚関係●笹沢左保

集英社

結婚関係

一九七八年二月一〇日 初版印刷
一九七八年二月二五日 初版発行

定価 八八〇円

著者 笹沢左保

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
郵便番号 一〇〇―

電話 出版部 (〇三) 二三〇一六三六
販売部 (〇三) 二三〇一六七六

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

結婚関係 目次

四十代の妻	5
三十代の夫	17
二十代の夫婦	29
夫 殺 し	40
新たな秘密	54
密 会	69
恐怖の声	85
不安な出張	99
第三の電話	113
絶体絶命	127
空白の夜	141
姑への疑惑	155
逆 襲	172
捜 索 者	185
夫の変化	202
接 点	213
毒 殺	225
イニシアル	239
心変わり	253
ぶつかった女	268
出 頭	282
終 着 駅	297
絶望の母	311
不運な夫	325
妻でな	341

写真
秋山庄太郎
装帧
後藤市三

結婚關係

四十代の妻

結婚して、二十年になる。だが、その二十年にわたる夫婦の歴史というものに、特別な感慨や愛着を覚えな。一つには、夫との二十年間の結婚生活に、不満が多すぎたせいだろう。

五年前には、銅婚式という言葉を、ふと思ひ浮かべたこともあった。しかし、いまは五年後の銀婚式など、興味の対象にもならなかった。

夫や結婚生活そのものに不満があつても、これまでの萩本幸江は思ひきつて表面に、それを打ち出したことはなかった。感情を爆発させることも、減多になつたのである。

その代わり、いまさら仕方がないではないかと、達観してもないのだ。二十年の夫婦関係から肉親のような情を得て、淡々とした気持ちでいられるという萩本幸江ではなかった。

夫の萩本辰夫が存在しなくなつたらと、幸江が初めて何となく考えてみたのは、三年前のことであつた。その後も何度か、同じことを思ひめぐらせている。

今年にはいつてから一日に一度は、夫がいなくなつたら

と想像するようになった。その想像は次第に、幸江の頭の中で現実性を帯びた計画に固まりつつあつた。

夫がこの世に、存在しなかつたら。

存在しないほうがいい。

いや、存在すべきではない。

そのように萩本幸江は、彼女なりの結論に近づこうとしていたのだ。

なぜ、二十年も連れ添つた夫の存在価値を、萩本幸江は認めようとしなくなつたのか。当然、萩本辰夫に男として失望を、夫として絶望を感じることが、根本的な理由になっている。

しかし、直接の原因になつたのは、息子の博之の進学問題であつた。博之は現在、高校二年生である。夫婦の間に子どもは、この博之ひとりだけだつた。

博之は色白の美少年である。顔立ちが整つていて、少年らしい気品を備えていた。それこそ見ようによつては、妖

しい色気さえ感じられる典型的な美少年であつた。

父親の辰夫には、まったく似ていなかった。透き通るように白い肌と、切れ長の目が幸江と共通している。それが幸江の息子自慢の、一つの根拠になつていた。

「本当に、綺麗ねえ。博之ちゃんとすれ違ふと、いつもハッとしてられるのよ」

「まるで、唇が花弁ね。もう二、三年もしたら、あの美男ぶりが悩みのタネになるんじゃないかしら」

「目つきと、顎の形が、お母さんにそっくりだわ」

近所の主婦たちにそう言われると、幸江は夫には見えたことのない笑顔の大安売りをすることになる。そこまで幸江が得意になれるのは、博之の容姿が群を抜いているというだけのことでないからである。

中学時代から、博之は常に学業成績第一位を、保って来ている。それが幸江には、この上ない誇りとなっているのだ。三年前、つまり博之が中学二年のときにまず、幸江はそのことで有頂天にさせられた。

「とにかく、優秀の一語に尽きます。何も、言うことはありません」

個人面談で担任の教師から、そのように太鼓判を押されたのだ。だが、その話を聞いて萩本辰夫は、ゲラゲラと馬鹿笑いをしたのである。

萩本幸江の常識で判断すれば、そこで夫の辰夫は大喜びをするはずであった。わが子が優秀だと言われて、喜ばない父親はいないだろう。

それも、ありきたりな褒められようではなかった。言うことなしと、担任の教師が敬服しているのである。当たり前な父親であれば、膝の一つも叩くのには違いない。

しかし、辰夫は嘲るように、大声で笑ったのであった。父親としての照れ臭さを、誤魔化そうとしたわけではない。明らかに、滑稽だという笑い方をしたのである。

「何が、おかしいんです」

幸江は、キツとなって言った。自分が辱めを受けたように、幸江は頭に血がのぼるのを感じた。

「だって、お前……」

盃を手にしたまま、辰夫はまだ笑い続けていた。

「おかしいことなんて、何もないじゃありませんか」

幸江は腹を立てたときほど、言葉遣いが丁寧になる。いわゆる紋切り型の、口のきき方であった。

「皮肉な話じゃないか」

辰夫は音を立てて、盃の酒をすすり上げた。

「どういうことです」

「東大進学を目ざしている子どもの親だったら、涙を流して喜ぶだろうよ。それが、わが家の息子と来ているんだから、何とも皮肉で滑稽で笑わずにはいられないよ」

「博之ちゃんだって、東大を目ざせばいいでしょう」

「冗談じゃない。大学なんて、行くことはないよ」

「何を言っているんですよ。いまは誰だって、大学卒の世の中でしょ」

「そういう世の中のはうが、どうかしているんだ。そんな馬鹿げた風潮に、迎合することはないさ」

「何もお金がかかる私立の大学へ、行かせようってんじゃないんですよ。実力があって、東大にはいれるんなら、それでいいじゃないですか」

「分相応ってことを、考えるんだな。博之は、高校だけでいいよ」

「博之ちゃんの将来ってものを、考えないんですか」

「それにまだ、博之は中学二年だろう。高校にはいつてから、成績がビリになるかもしれないんだ」

「博之ちゃんに限って、そんなことにはなりませんよ」

「その博之ちゃんという呼び方は、やめたらどうなんだ。おれよりも、背が高い息子なんだよ。それを母親が、ちゃん付けで呼ぶなんて、聞いていて気持ちが悪くなる」

「そんなこと、こっちの勝手でしょ。博之ちゃんは、わたしの子なんですからね」

幸江はそこで、座を立てってしまった。辰夫を相手に、何を言っても仕方がないと思ったのである。だが、気が小さいくせに、そのことに關してだけは、妙に頑固な辰夫であった。日頃から辰夫は、博之を大学へは行かせないと、言い張っているのである。

三年前に初めて幸江が、夫が存在しなければとぼんやり考えたというのは、このときのことだったのだ。あるいはそれが、殺意の起点であったと、言えるのかもしれない。

どうして辰夫は、わが子の大学進学に反対するのだろうか。

それは幸江にも、はっきりわかっていなかった。辰夫も理論的に、反対理由を説明しないのである。だから、一種の感情論としか、受け取りようがない。

分相応ということを、考えるべきだ。

学歴優先主義の間違った風潮に、迎合することはない。

ルーズな学生生活は、むしろ無意味ではないか。

高校だけを出て、早く勤労青年になったほうが、当人のためになる。

辰夫はそんなふうな言い方を、するだけであつた。辰夫の主義だとも、言ったりする。そして、その主張に辰夫は、妙に頑なに固執するのだった。

それを幸江は、辰夫の一種のヒガミと、解釈していた。悲しい話だが幸江は、一生うだつが上がない駄目な男だという自覚を、夫が十分に抱いているものと、読み取っているのである。

辰夫は、旧制中学しか出ていない。勤務先は、全国雑誌教育協会事務局というところであつた。企業ではなくて、社団法人の事務局である。

昇進とか出世とか、榮転とかには無縁の職務であつた。事務局には、十人たらずの職員がいただけだった。それも大半が、若い女子職員なのだ。

いわば腰掛けに勤めるので、女子職員の顔ぶれは常に入れ替わっている。四十八歳の萩本辰夫が、最年長者であつた。もちろん、役付きといったものではない。

事務局長は、辰夫よりも若かつた。その全国雑誌教育協会事務局に、辰夫は三十年も勤めている。あまり忙しくない職場に、辰夫は未だに無遅刻・無欠勤で、通い続けているのだった。

恐らく今後とも、辰夫は死ぬまで同じ日々を繰り返すことだろう。実直で小心なサラリーマンを、絵に描いたような辰夫の生活ぶりであった。

二十年前に、辰夫は三つ年下の幸江と結婚した。もともと幸江の家は、「萩本屋」というタバコの販売店を兼ねた雑貨商であった。大田区の南千束二丁目では、かなり古くからある商店だった。

その萩本屋のひとり娘のところへ、辰夫は婿入りしたのであった。辰夫が萩本屋の婿になって四年後に、幸江の両親が相次いで病死した。

辰夫はサラリーマンであり、商売のことは何もわからなかった。幸江の父親が死ぬと、もう雑貨商は成り立っていかなかった。萩本屋は雑貨商を廃業して、タバコ販売店だけ続けることになった。

現在も、タバコ屋であり、店のことはすべて幸江がひとり取り仕切っている。タバコの自動販売機を据えつけてからは、店番をする必要もなくなった。

もちろん、タバコ屋らしい店先の体裁も整えられているが、硬貨がなかったり、カートンで買いに来たりする客の応対をするだけですむ。幸江ひとりで、十分であった。

つまり、辰夫の給料だけに頼って、生活を支えているわけではないのだ。仮に辰夫が、この世に存在しなくなったとしても、幸江と博之ふたりだけの生活は維持できる。幸江の心のどこかには、そうした計算もあったのである。

もう一つ、幸江の胸に深く刻み込まれていることがあった。

それは、去年の秋の記憶である。辰夫と博之が、些細なことから口喧嘩をした。辰夫が酒を飲みながら、博之にもっと身体を鍛えるように心掛けたらどうだと、小言めいたことを言ったのだ。

確かに博之は、軟弱に見えた。背は高いが、全体に細すぎる。色の白い美少年であれば当然、腺病質な感じにもなるのであった。それに博之は、スポーツとか運動とかに興味を示さなかった。

何よりも、読書が好きであった。中学時代は化学や生物の専門書が中心で、小説は二の次だった。それが高校へはいると、文学書を読み漁るようになったのだ。

古典の世界文学全集から始まって、いまでは近代文学に夢中になっている。本来が早熟の傾向にあった博之が、最近一段と大人っぽくなったのも、多分その影響なのに違いなかった。

「トルストイかジイドか何だか知らないけど、そんな文学なんて将来のためにはならないんだ」

辰夫が酔った勢いで、そんなことを言い出したのだ。辰夫は普段、妻子に対して文句の一つも言ったことがない。無口というより、はっきりしたことを言えない性分なのである。

気弱な笑顔でいて、むしろ妻子に媚びるようなところが

あった。それが、酒を飲むと一変する。酒癖が、悪いわけではない。大きな声を出したりもしなかった。

外で飲んで来るといふことは、まったくないのである。必ず家に帰って来てから、晩酌を楽しむのであった。それも日本酒しか飲まないし、定量は二合ぐらいだった。

好きだが、弱いのである。銚子三本の酒を飲むと、顔が真っ赤になる。よろけて転んだりするし、目もあけていられないほど眠くなってしまうのだ。

その代わり、銚子一本の酒をあけた頃から、辰夫なりに気が大きくなるのである。妙に古臭いことを言って、お説教をしたがるのであった。

それも相手は、幸江と博之に限られている。他人に対しては、何も言えない。だからこそ外では飲まずに、帰宅してから晩酌だけに徹しているのだろう。

「お父さん、読んだことがあるのかい！」

不意に博之のほうが、大きな声を張り上げた。

「そりゃあ、読まなかったよ」

「だったら、批判的なことを言う資格はないだろう」

「しかし……」

「無教養な自分を見習って、子どもに説教する親がどこにいるんだい」

「本を読まなければ、無教養だというのか」

「お父さんとおれとは、違う人間なんだ。くだらない干渉は、やめてくれよ！」

博之は荒々しく立ち上がると、店のほうへ駆け出して行った。驚いて幸江も、そのあとを追った。博之はサンダルを突っかけると、店の外へ飛び出した。

「ちくしょう！ あんなおやじ、大嫌いだ。見ていだけで、むかむかして来る。死んじやえばいいんだよ、あんなの……」

博之が歩きながらそう口走るのを、秋の夜風の中で幸江は耳にしたのであった。

間もなく、洗足池の西側に出た。晩秋の夜風が冷たいせいか、洗足池の周辺には散策する人の姿もなかった。

博之はもう、石を蹴飛ばしたり、腕を振り回したりするような仕種をやめていた。いくらか、冷静になったようである。それを見定めてから、幸江は遠慮がちに博之と肩を並べた。

博之は黙って、池の黒々とした水面を見据えていた。幸江も、それに倣った。自動車の走行音だけが、絶え間なく聞こえて来る。それがむしろ、あたりの静寂を強調しているようだった。

その静寂に、幸江は心の安らぎを覚えていた。この場に、夫はいない。いまは、わが子と二人きりなのだと、幸江はほのぼのとした温かみを胸のうちに覚えていた。

「博之ちゃん……」

幸江は池の水面に目を落としたが、しみじみとした声で呼びかけた。博之は、返事をしなかった。

「あんた、お父さんが嫌いなね」

幸江は、はるかに背の高いわが子を、見上げた。

「嫌いだよ」

まだ怒っている口調で、博之が唸るように答えた。

「いつ頃から……？」

「よく、わからないよ」

「中学二年ぐらいからかな」

「そんなところだろ」

「どうして、嫌いになったのよ」

「はつきり、言えないね」

「でも、何か理由があるんでしょ」

「何だか、あのおやじを見ると、情けなくなってくるんだよ」

「うん、わかるような気がする」

「いったい、何のために生きているんだろう、おやじの世界って、どこにあるんだらうかってさ」

「お父さんの世界って、わが家だけなのよ」

「そのわが家にだって、おやじの世界はないような気がするね」

「そうかしら」

「二人きりしかない家族、その家族にだっておやじは背を向けられているんだからな」

「お母さんは、別に……」

「隠さなくたっていいよ、雰囲気でわかるんだからね。お

母さんだって、おやじに対しては冷えきっているよ」

「とにかく、あんたはお父さんを、尊敬できないってことね」

「単純すぎるし、それに低級だよ。次元が、低いんだ。そのために自分は敗北もしたし、一級品の生き方からはみ出してしまったということに、まるで気がついていない。誰だって、軽蔑したくなるよ」

「あんたもいつの間にか、そんなふうにまで考えるようになったのね」

「あのおやじと一緒にいると、こっちまでおかしくなっちゃりような気がするよ。やってやろうって意欲が、しぼんじやうんだな。ぼくの将来の見本が、あそこにできているじゃないかって……」

「駄目よ、あんたまで影響されちゃうなんて」

幸江は、博之の腕を掴んだ。幸江は、真剣だった。博之のためにも、夫が存在しないほうがいいのではないかと、本気で考えたことを幸江はいまでも、はつきり記憶している。

幸江は、いわゆる教育ママではない。

息子を支配したり、指導したり、あと押しをしたりするだけの能力が、自分にはないと思っている。学校や勉強のことについても、何もわかってはいなかった。

知識、思考力、そして判断にしても、博之のほうが先行

している。幸江はただ、見守っているだけでよかった。教育ママになる必要も、ないのである。

博之は自分のペースで、好きなように勉強している。依然として、成績は優秀だった。それも群を抜いて優秀なのであり、まず大学入試で苦勞をすることはないだろうと、高校二年になっての担任の教師も言っているのだった。

博之に、任せておけばいい。幸江はすでに、一人前の男として博之を見ている。夫よりも頭がよく知識が豊富で、思慮深いし、ものを見る目というのを備えている。

辰夫とは、比較にならないほど頼もしい。息子を過保護にするどころか、むしろ寄りかかりたいくらいに信頼しきっている。

容姿もますます魅力的になり、そのことが近所の主婦たちの間で評判になっていた。幸江も最近では美少年というより、博之に美青年を感じ始めていた。

何もかも、辰夫とは正反対であった。辰夫に欠けているあらゆる長所を、博之はすべて備えていると幸江は思う。博之のことを考えるだけで、幸江は笑顔を隠しきれなくなる。

「たったひとりのお子さんだし、もう可愛くて可愛くてしようがないでしょ」

他人にそう言われると、幸江はさあねと首をかしげる。そうした他人の見方が、幸江にはピンと来ないからであった。

母親として息子が、目に入れても痛くないほど可愛いと、幸江の感情はそんな単純なものではなかったのである。博之に対する幸江の気持ちには、もっと複雑な要素がいろいろと入りまじっている。

わたしの生き甲斐、わたしのすべて、わたしの命、わたしの宝物、わたし自身、と並べ立ててみても、何かものたりないような気がする。

わたしの息子。

わたしの恋人。

わたしの理想の男性。

わたしの夢。

わたしの希望。

それだけ付け加えて、幸江はようやく納得できるのであった。

わたしの夫の存在は、その蔭に完全に隠れてしまっていた。いや、無に等しければ、苦にはならないのである。無用ののに、やはり辰夫は存在しているのであった。

辰夫のあらゆるところが、気に入らなくなっていた。なぜ、十年一日の如く、変わらない男なのだろうと、苛立たしさを感じる。晩酌を始める辰夫を見ると、生理的な嫌悪感をさえ覚えるのだった。

気持ち、冷えきっているだけではない。夫がつくづくいやになり、完全に嫌いになったのだと、幸江は冷静に自分を観察していた。何があろうと夫に対しては、本気にな

って怒るまいと思うのだった。

ただ、自分と博之のために、辰夫は存在すべき男ではない、という気持ちだけがはっきりしている。

辰夫がこれまでになく荒れ狂ったのは、そんなときだったのである。

九月も、半ばがすぎた。

高校二年も二学期にはいり、博之はどことなく意欲的になつていた。夏休みは、近くの友人の家を訪れる程度で、どこへも遊びに行かなかった。

家にいれば終日、自分の部屋に引きこもっている。小説を読み、ステレオで音楽を聞き、それ以外は勉強をしていたようだった。それだけに、二学期にはいつてからの博之には、余裕が見られた。

「お母さん、決めたよ」

学校から帰って来たとともに、博之はそう言ってニヤリとした。

「何が、決まったの」

博之を振り仰いだ幸江は、釣られて口許を綻ばせた。

「東大だよ」

「あら、そう」

「今日、先生と話したんだ。先生も、賛成してくれたよ。いまのままでゆけば、東大も楽勝だろうってさ」

「よかったわね」

「ぼくにも、自信がある。だから、決定だよ」

博之は大人っぽく笑って、二階への階段をのぼって行った。

「わかったわ」

そう声をかけてから、幸江は深々と溜め息をついた。嬉しい知らせを受けて、満足したときに思わず洩らしてしまうような溜め息であった。

その夜、幸江は辰夫に何も話さなかった。酒を飲んでいるときは、避けたほうがよかったからである。翌朝、辰夫の出がけに幸江は、そのことに簡単に触れておいた。

「博之ちゃんの東大受験が、決まりましたからね。先生も大丈夫だからって、賛成して下さったそうですよ」

幸江は、辰夫の背中に言った。それは相談でも、報告でもなかった。一方的な、通告であった。博之の決定は、幸江にとって命令に等しかったのだ。

辰夫は、黙っていた。シラフであれば、何も言えないのである。無言でいるのが、せめてもの抵抗なのだった。やはり辰夫は、博之の大学受験に反対する意志を、変えてはいないらしい。

「行って来る」

そう言って、辰夫は玄関代わりの店のガラス戸の外へ消えた。その後ろ姿に、これまでにないことをやろうといった決意の色は、まったく見られなかった。

しかし、その夜に辰夫は、前例のない行動をとったので

ある。辰夫が帰宅したのは、夜の九時すぎであった。これは一年に一度、あるかないかのことだった。

辰夫は、ひどく酔っていた。このほうは、結婚してから初めてのことであった。家の外で酒を飲み、泥酔して帰宅する。珍しいというよりも、信じられないような出来事だった。

「博之を、呼んで来い！」

茶の間に洋服のまま寝転がると、辰夫は大きな声で怒鳴った。顔色が真っ青だし、目がすわっている。これほど酔ったのは、生まれて初めてのこともなかもしれない。

「駄目よ！」

幸江も、甲高い声を張り上げた。

「何を……！」

寝転がったままで、辰夫は座卓を蹴った。

卓上には一応、晩酌の用意がしてあった。座卓は柱にぶつかって、弾むように揺れた。銚子と小鉢、それに小皿が一斉に、畳へ滑り落ちた。

畳の上に枝豆と、イカの刺身が散乱した。銚子が円を描きながら、燗をする前の酒をぶちまけた。醬油が飛び散って、辰夫自身のズボンにまではねた。

辰夫が泥酔して帰宅した理由は、わかりきっている。今朝、幸江から一方的な通告を受けた結果が、これなのである。そうと明らかだけに、幸江は情けなかった。

「いったい、何の真似なの！」

幸江も、血相を変えていた。

「博之を呼んで来いって、言っているんだ！」

両腕を左右に投げ出して、辰夫は大の字になった。

「あんたね、こんなに酔わなくちゃあ自分の子どもにも、まともに口がきけない人だったの！」

「馬鹿を言うな！」

「だったら、代わりにわたしが聞くわ。言いたいことがあるんなら、ちゃんとすわって言いなさいよ！」

「お前じゃあ、話にならないんだ！」

「いいえ、わたしで十分ですよ。博之ちゃんとわたしは、一心同体なんですからね。わたしが、博之ちゃんの代理を勤めます！」

「また、始めやがった。博之ちゃん、博之ちゃん、一心同体だなんて、気持ち悪いことを言うなって……！」

「さあ、言いなさいよ。そんなに酔っていたって、いざとなれば言えないんですよ。この意気地なし！」

「どうせ、意気地なしだよ。おれが婿だからって、二十年間も馬鹿にし続けやがって……！」

「いまさら、何を馬鹿らしいことを言っているの。まったく、情けなくなるわ！」

「よし、はっきり言ってやろう！」

「聞きましょう！」

「博之は、大学へ行かせない。東大もヘチマも、あるもんか！」

「あんたに、そんなことを決める権利はないわ」

「おれは、博之のおやじだぞ」

「おやじならおやじらしく、どうして博之ちゃんを大学へは行かせたくないのか、納得できるように説明しなさいよ」

「おれはな、いやなんだよ」

「何が……？」

「父親に学歴がないと、息子を東大へ行かせたがる。父親が安サラリーマンだからって、その分の夢を息子に託して将来の出世を期待する。そういういまはやりの親心ってのが、どうにも我慢できないんだよ。おれは確かに、学歴もない無能な男さ。でも、それでいいじゃないか。博之がおやじと同じような一生を過ごしたって、おれはいいと思うんだがねえ」

語尾が震えて、辰夫は涙をすすり上げた。辰夫の目から、涙が溢れ出ていた。

「やっと、本音を吐いたわね。まったく、お話にならないわ」

夫の泣き顔を、幸江は冷ややかに見やった。幸江はもう、怒りを感じなくなっていた。酔っぱらって愚にもつかないことを主張し、拳句の果てにセンチメンタルになって泣き出す。そんな夫を幸江は、完全に見放していたのだ。

意見として聞けば、辰夫の言い分は至極ごもっともということになる。学歴無用論であり、息子に対する母親の期

待過多への戒めであった。

もし辰夫が第三者であるならば、一つの意見として尊重したくもなる。しかし、辰夫は自分というものを中心に置いて、ものを言っているのであった。

自分には、学歴がない。うだつが上がらないサラリーマンとして、一生を終えることになる。息子の博之も、そうした自分と同じであっていいのではないか。

と、そこに辰夫は、あくまで自分というものを置いているのである。辰夫は息子が、自分と比較にならないような栄光の道に踏み出すことを、恐れているのだ。

息子がエリート・コースを歩めば、辰夫はこれまで以上に劣等意識を押しつけられることになる。ひとり取り残され、はみ出してしまう。

辰夫のヒガミ根性が、そうなることを恐れているのだ。辰夫は更に、孤独にさせられる。息子が手の届かないところへ行ってしまう、それが辰夫にはやりきれないほどの寂しさになる。

だから、博之を大学へ進学させない。

そうなると、適正な意見とは言えなくなる。感情論であり、自分勝手な主張ということになるのだった。辰夫はつまり、本音を吐いたのである。

「子どもに、そんな考えを押しつけられませんか」

幸江は、台所の板の間にすわった。冷ややかな顔というより、無表情であった。